解題 Alfred C. Oppler, *Legal Reform in Occupied Japan: A Participant Looks Back*, Princeton University Press, 1976

この書籍は、占領期法制改革において GHQ 側で主導的な役割を果たしたアルフレッド・C・オプラー（1893-1982）の回顧録であり、オプラー自身の献辞を添えて團藤に献呈されたものである。團藤は本書に目を通し、特に自身が登場する箇所及び索引に下線を施している。なお、後に日本語に翻訳された同書も、訳者から献呈されている（アルフレッド・オプラー／内藤頼博監修／納谷廣美・高地茂世訳『日本占領と法制改革――GHQ 担当者の回顧』（日本評論社、1990 年））。

團藤文庫の史料上の特色として、書籍に関連する人物や事象についての書簡や史料が挟み込まれる形で保管されているという点が挙げられる。このことは、龍谷大学への史料の移管にあたって、書斎や書架にあった史料や書籍をほぼそのまま受け入れるという、理想的なかたちがとられたことの帰結であり、書籍を起点にして團藤がどのような思索をめぐらせていたかをトレースすることを可能としている。

本史料には、刊行に先立って活動を開始していた刑事訴訟法制定過程研究会において、オプラーを始めとする制定過程に関係する人に対するコンタクトが行われていた様子を伺わせる松尾浩也からの書簡が挟み込まれており、同研究会の活動の一端を知ることが出来る。また、回顧録刊行後に始められてオプラーの死去まで続いた書簡のやりとりを通じて、團藤が現行刑事訴訟法の歴史性について再確認していく過程を知ることが出来る点が史料として興味深い。更に、従来あまり知られていなかった晩年のオプラーの動静についての情報も含まれている。オプラーの旧蔵資料の多くは、現在、ニューヨーク州立大学オールバニー校が所蔵している移民関係史料（M. E. Grenander Department of Special Collections & Archives）に収められているが、本史料によると、残余の史料が別途存在している可能性があるようである。